

フッサールにおける想起論と歴史性の問題

——『受動的総合の分析』における「志向的分析」と「思弁的思考」の問題——

畠 山 聡

序

フッサールの三〇年代のいくつかのテクストには、〈想起できないもの〉に対する関心が示されている。例えば『夜の対話』と題された草稿の中では、「私はおとな (Reifer) として、私の子供時代を想起する」が、そのような「子供時代」には、「記憶的ではない (nicht erinnerungsmäßig) 過去の地平」として「原子供性 (Urkindlichkeit)」(XV, S. 583) が伴っているということが、問題の一部としてあるが、確認されている。また、それよりも前に書かれたある草稿は、「世界構成を可能にするための構成的な出来事としての誕生と死 (Geburt und Tod)」を題名の一部とするが、そこでは、「誕生と死」について、「想起できない」ということ (Unvernöden der Erinnerung) が、単に忘れやすいということ (Vergelichkeit) に過ぎず、忘却されたものの想起の潜在性 (Potentialität) が同時に開かれたままである限りは、世界の構成は不十分である」(XV, S. 171) と言われている。つまり、「誕生と死」、特に「誕生」が、完全に想起不可能である限りにおいて、「構成的な出来事」としての役割を果たしていることに、関心が向けられている。

ところで、我々は、このような関心こそ、フッサールにおける歴史性の問題を考察する上で、一つの特権的な通路となり得るのではないか、ということをも、他の所で示唆した¹⁾。本稿では、その点についての詳論は一切省き、「フッサールにおける歴史性の問題」ということで、専ら、〈想起の限界を越えた私の過去〉の可能性を、超越論的な問題設定の枠組みの中で——恐らく徹頭徹尾それを維持することはできないとしても、先ずは可能な限りその枠組みの中で——思考していくという問題を意味するものとしておく。

さて、そうすると、フッサールにおける歴史性の問題は、〈想起できないもの〉を中項にして、先ずはフッサールの想起論を主題化することを要請するだろう。本稿では、一九二五／二六年冬学期の講義に用いられた草稿をもとに編集された『受動的総合的分析』（IX以下『分析』と略）の本文を丹念に読解し、そこで行われた想起についての「志向的分析」をまとめてみたい。想起の「可能性の発生的条件」について、「触発」の概念を媒介として分析が進められていくが、その条件が、同時に、想起の「誤謬」の「可能性の発生的条件」となつてもいることが示されるだろう（一—四）。

ところで、このテキストには、忘却された過去の規定をめぐって、或る興味深い〈揺れ〉が見られるのであるが、我々は、この〈揺れ〉をフインクの「思弁的思考の問題」の観点から解釈し、また、想起の「志向的分析」で得られた結論を、この〈揺れ〉を通じて更に一步先に進めることにより、想起自身の内に、想起の不可能性の契機を思考し得る可能性を指摘し、上述したようなフッサールの歴史性の問題へとつなげていく可能性を示唆したい（五）。

一 問題

一・一 過去の意識は如何にして可能か

『分析』に本文として収められたテキストの、少なくとも、第二篇後半以降、最も重要な問題は、「純粋自我が」

「自分の体験としての過ぎ去った体験」を「自分の背後に所持している」「という意識を獲得し得るのは如何にしてかという問題」(123)であり、この問題を解決するために「連合」特に「再生的連合」⁽²⁾(120)、つまり「再想起(Wiedererinnerung)」の分析が導入される、と言ってよいだろう。しかし、もちろん、例えば『イデーニー』では、「純粹自我の体験流」(III, 180f.)について、或る程度主題化され、特に「どんな体験の今も」「所持している」「以前の地平」(III, 184)は、「過去把持」によって説明されていたのであり、また、「再想起」についても、例えば、『内的時間意識の現象学』(以下『時間講義』と略)に収められたテキストの中に、豊富な記述があるわけである。とすれば、『分析』の固有性はどこにあるのだろうか。

一・二 上の問いは「発生的に」分析される

次のように言われている。

「原理的に再想起の如何なる可能性も欠けているとすれば、また更に、この可能性の発生的諸条件(可能な喚起の諸条件)……が充たされぬままであるとすれば、主観性が、何か自分の(eine eigene)過去を所持することなど本当にできるだろうか……」(124)

ここでは、単に「可能性の条件」が問われるのではなく、より具体的に「可能性の発生的諸条件」が問われるわけである。例えば、「第二次想起」としての「再想起」の可能性は、「第一次想起」としての「過去把持」に基づく、というような説明ではなく、再想起の可能性を、その発動・発生に即してより具体的に分析しようとするわけである。『分析』固有の問題関心は、先ず、このように位置づけることができるだろう。しかし、この問題は、次にあげる再想起の二種の区分に依じて、もう少し限定した方がよいだろう。

二 近想起 (Naherinnerung) と遠想起 (Fernerinnerung)⁽³⁾

二・一 近想起

先ず、「近想起」とは、「まだ根源的に生き生きとしている (urliebend) 過去把持によって」「喚起された再想起」(112)と定義される。例えば、たった今言われたことを復唱する場合がそうであろう。『時間講義』の記述を借りて言えば、「たった今体験したことを言わば再述する (rekapitulieren)」(ZB, §30, 418) のが、「近想起」である。

しかし、「近想起」の可能性しかないとすればどういふことになるだろうか。仮に、聞いては復唱し、聞いては復唱し、ということは何度か繰り返し返し、その内容が、記憶ないし習慣として「所持」されるに至ったとしても、直前のことを想起することしかできないのだとすれば、その内容の「既知性質」が意識されることはない筈である⁽⁴⁾。従って、「自分の過去」を意識することができるとするには、「近想起」が可能であるというだけでは、不十分であることになるわけである。そのようなわけで、フッサールは次のように言うことになる。

「我々は、遠想起を正当化して初めて、内在的時間対象（「ここ」では、「自体的に (an sich) 存在するもの」として「繰り返し」認識し得る「自分の過去」の体験）を「自体的に」存在するものとして常に再認する (wiedererkennen) 可能性を得る。」(113, Anm. 1)

二・二 遠想起

「応定義をあげておけば、「遠想起」とは「過去把持の遠地平 (retentionaler Fernhorizont)」（「忘却の遠地平」(149)）に入り込む (hinengreifen)」「再想起」(112)であり、つまり、「一旦忘却した体験を再び想起することを指

すわけである。

以上から、先の問題との関連で言えば、再想起の中でも、特に、「遠想起」の「可能性の発生的諸条件」を問うことが、このテキストの主要な問題でなければならないことが明らかになった筈である。

二・三 『時間講義』による補足

二・三・一 『時間講義』における二種の想起の区別

しかし、問題を更にもう少し限定するためにも、ここで、『時間講義』を参照することにする。『時間講義』の中には、「近想起」、「遠想起」という言葉こそ使われてはいないが、想起について同種の区別がなされている箇所が見出される。

例えば、三十二節では

「以前の時間野……が再生され、そしてその再生された今が、まだ新鮮な記憶 (frische Erinnerung) の中で生き生きとしている時間点と同一化される。」(ZB, §32, 425)

とある。或いは、三十節。

「たつた今過ぎ去つたものの過去把持がまだ生き生きとしている間に、その過ぎ去つたものの再生的な像が現れる、ということとはしばしば起こる。……我々はたつた今体験したことを言わば再述する (rekapitulieren) のである。」(ZB, §30, 413)

これらの記述が、先程の「近想起」の定義と一致していることは明らかであろう。

他方、再び三十二節の記述。

「再生される時間野は、顕在的現在の時間野よりも広範囲に及ぶ。その中から過去の一点を取ってみれば、再生は、この点がかつて今として存在していた時間野との重なりあい (Überschiebung) を通じて、より遠い過去への還帰を生ぜしめるのである等々。」(ZB, §32, 425)

細かい点の注釈を省けば、「新鮮な記憶」ないし「過去把持」がまだ「生き生きとしている」「顕在的現在の時間野」よりも「より遠い過去への還帰を生ぜしめる」「再生」が、「遠想起」と一致することも、これまた見易いであろう。

二・三・二 総合の性格の違い…端的な「同一化」と「重なり合い」

しかし、ここで注意すべきことは、両者の「総合」の性格の相違が示唆されている点である。すなわち、前者においては、「新鮮な記憶」においてまだ保持されている「今」と「再生された今」との間に端的に「同一化 (identifizieren)」が語られているのに対し (Vgl. §30, 418)、後者においては、「重なり合い」ということが言われている点である。ここで、この「重なり合い」が何を意味しているかの説明は、差し当り省くが、しかし、我々としては、『分析』における想起の議論を読解するに際し、もう一つの方向付けが得られたことになるだろう。則ち、想起、特に、「遠想起」の「総合」の性格はどのように説明されるか、という点である。

二・三・三 もう一つの問題

しかし、更にもう一つの問題を呈示しておきたい。想起の区別もされていて、また、その総合の性格の違いも、指摘されていないながら、何故、『時間講義』では、想起の可能性は、少なくとも『分析』における程には、問題化しな

かったのか。勿論、そこに必然的な理由があったと考える必要はないのであるが、しかし、そのことと結び合う何らかの背景的事情を想定することは許されるであろう。

『分析』の第三篇の或る箇所⁵⁾に次のような一節がある。

「以前私はこう考えていた。この過去把持的に流れる⁶⁾ (retentionales Strömen) つまり、過去存在を構成する⁷⁾ (Vergangensein-Konstituieren) は、完全な闇においてもまた、絶えることなく進行していると。しかし〔今は〕、このような仮説はなくてもよい (entbehren können) ように思われて仕方がないのである。つまり、このプロセスそのものが停止するのである。」(177)

一九二五／二六年に書かれた (Vgl. 446) この箇所に編者は脚注を付け、付録として収められたテキストの或る箇所を指示している (316f.)。差し当り、この指示が、今ここで必要な程度には十分に適切なものであることを認めるならば⁸⁾、そのテキストの書かれた年代 (1920f.) からしても、また指示されている箇所の内容からしても、この「以前」は、更に、『時間講義』をも指していると考えることができる。例えば、「過去把持的変化の恒常性」(ZB, 435)、「変様の連続体」⁹⁾、「絶えざる変様」(ZB, 450) などといった言い方は、フッサールアーナー一〇巻に収められた関連草稿にある「如何なる記憶もそれ自体において連続的変様であり、先行した展開全体の遺産 (das Erbe) を……それ自身の内に担っている」(X, 327)¹⁰⁾ というより明示的な記述をも念頭に置きつつ、「以前」の「仮説」と重なるものとすることができるであろう。

このことが、「連合」の問題を呼び寄せた、一つの背景的事情である、と想定し得るのである。実際、過去把持の過程が停止したへかつての現在¹¹⁾は、「流れる生 (Leben) をなくし」(177)、「死に (tot) 」(177f.)、「無意識

「Unbewußtsein」(179; Vgl. 165, 167)の形式で「遠領圏(Fernsphäre)」に「沈殿する」(178)とした上で、次のように『分析』の問題を(再)定式化するのである。

「それ(『死んだ』、『沈殿』として残った「意味」が如何にして〔再び〕効果を及ぼし(wirksam werden) …得るのか、これが連合の問題である。」(178)

「よみがえらせる＝生き返らせる(wiederaufleben lassen)」(114)こととしての「遠想起」について、その可能性を問うことが「連合の問題」だというわけである。以上により、『分析』の問題を方向付けた一つの可能な背景的事実は確認できたと思われる。

しかし、我々は、再びこの箇所に戻って来るであろう。この箇所は連合の分析の途中に出てくるのであり、今羅列した「生」や「死」などは、「連合」ないし「触発」概念によって規定されているのだから、少なくともそれだけの理由でも、そうする必要はあるわけである。

三 「再生的連合」の三段階

では、連合の分析を簡単に見ていくことにする。まず、「再生的連合」、則ち、再想起の三つの契機の確認から始める。

① 「原連合(Urassoziation)」

先ず「原連合」(180, 151, 157)の契機、則ち、「生き生きとした現在の対象構造を可能にする、つまり、多様なものを統一するあらゆる種類の根源的総合を可能にする(『多様な所与をまとめ』際立ち(Abgehobenheit))」を形成

する)……触発的喚起(「|| 刺激(Reiz)を感じて気付く(merkich) へと」)(180)の契機。

② 「逆射的(trickstrahlend) 喚起」

次に「逆射的喚起」(180c)の契機、則ち、「(過去把持のプロセスを通じて)暗くなった空虚表象を再び判明化し、それらの内に内含された意味内実を触発的に有効化する(zur affektiven Geltung bringen) 喚起」(181)の契機。

③ 「再想起」

そして、「先の喚起された空虚表象が再生的直観に移行する段階」(181)としての、本来的意味での「再想起」の契機。

例えば、現在のある出来事に注意を引きつけられ(「原連合」)、「前にもこんなことがあったかもしれない」と思い(「逆射的喚起」)、「あの時はどうだったろう」と過去の出来事を思い出してみる(「再想起」)などという場合、上の三契機を再想起の発生上の三段階として確認することができるだろう。

しかし、再想起は、いつもこのように「発生」していると言えるだろうか。例えば、何かを思い出している際にふと「何故こんなことを思い出しているんだろうか」と思うことがあるだろう。そして、その場合、その想起に向かったへきっかけが思い出せたときに、「ああそうだったのか」と納得がいくだろう。しかし、無論、いつもそのへきっかけが思い出せるとは限らないし、そもそも、いつもへきっかけを思い出すとするわけではないだろう(「連合は気付かれないままに(unbemerkt)も起る」。(122))。しかし、どの再想起についても、そのへきっかけに思いを致すことができるのでなければならぬ(können müssen)とは言えないだろうか。権利上、何らかの現在の出来事——想起そのものでもあり得る——がへきっかけであり得るといふことを、再想起が発生し得るための条件、つまり、再想起の「可能性の発生的条件」と考えることができるものとして、取りあえず先に進むことにする。

三・七 「逆射的喚起」の可能性

再想起、特に、遠想起の「可能性の発生的条件（喚起の諸条件）」を考える上で最も重要になってくるのが、現在の出来事と再想起とを結びつける「逆射的喚起」の契機であることは見易い。実際、近想起の場合は、定義から、「喚起されたもの（『過去』）は根源的に生き生きとした構成的連関の内に再び組み込まれる」（178）のに対し、遠想起の場合は、そのような連関は絶たれ、喚起される過去は「生き生きした現在の表象と非連関的」（179）だからである。ところで、この契機を説明する上で最も重要な役割を担わされているのが、「触発」についての分析なのである。

四 触発 (Affektion)

四・一 触発

狭義の触発

「我々が触発という名の下に理解するのは、刺激として意識されている限りでの刺激 (der bewußtseinsmäßige Reiz)、意識された対象が自我に対して及ぼす特有の牽引 (Zug) のことである。」(148)

先ず注意すべきことは、「触発」は、実際に「注意を向けること (Zuwendung)」と同じではないということである。むしろ、能動的に「注意を向ける」に先立ち、対象からの「刺激」を意識し、へ気になるく・へ気付く (Merklchsein) といった状態が、狭義の「触発」の意味するところである。

広義の触発

しかし、フッサールはこの「触発」の概念を、もう少し広い意味でも使う。例えば、何かの拍子に、テーブルに

置かれている花瓶が気になり、変な形をしているな、などと思つたとする。その際、「現実的に触発している」のは、花瓶の外側の部分であり、花瓶の内側は気になっていないと言ふべきであろうが、しかし、何らかの仕方で、花瓶の内側も共に意識されている筈であり、「内部地平」、そして、ごく自然に気になり得る傾向を持つていふと言へるであろう。この限りで、内側は「触発傾向 (Tendenz zur Affektion)」を持つていふとされるのである。「現実的触発 (wirkliche Affektion)」(＝狭義の触発)に、この「触発傾向」を加えた、広い意味においても、「触発」ということが言われるのである。そして、この広義の「触発」は、意識の「生動性 (Lebendigkeit)」と等置され、現実的に気付かれているか否かは、「触発」＝「生動性」(388)の「段階性」の「相対的な」差異として把握されるわけである。「触発」の第二の定義を引いておく。

「ここで我々は先ず触発という名の下に次の二つのものを区別しなければならない。(1) 体験、意識所与のあの変動する生動性、つまり、所与がその特別の意味において気付かされている (merklich) かどうか、更にまた場合によっては、それに現実に注意が向けられ (aufmerksam)、把握されているかどうか、がその生動性の相対的な高さ (relative Höhe) に依存するところの生動性〔広義の触発〕。そして、(2) この気付かれていること (Merklichsein) それ自体〔狭義の触発〕。」(166)

触発零。生／死

ところで、このように「触発」概念を拡張すると、広義では、一切が触発的なのではないか、という疑問が生じてくるかもしれない。しかし、「生き生きした (lebendig) 現在」に属さず、忘却されているものは、触発が「零」であるとされる。確かに、過ぎ去つたものも、過去把持を通じ、自然に何程かは触発的であり得るであろう。しかし、先にも見たように、『分析』においては、このような過去把持の「プロセスそのものが停止する」とされていたのであった。つまり、過去把持は「終わり」(169, 177)に達し、触発が零になるわけである。因みに、先に見た、

生／死、意識／無意識などは、差し当たり「自然的な語りの転用 (Übertragung)」(163)であったのであり、根本的には、触発の正／零として規定されるべきものであった (Vgl. 170; 163) ことをここで確認しておく。

四・二 「伝播 (Fortpflanzung) の法則」

ところで、触発は何によって決まるのだろうか。例えば、突然大きな音が鳴れば、その音に気付くだろう。そうすると、触発は所与の強度によって決まるのだろうか。

しかし、例えば、真夜中にかざごと物音が聞こえれば、昼間であれば回りの音にかき消されてしまつて聞こえないような小さな音でも、気が付くであろうから、そうは言えないだろう。ところで、二つの例に共通しているのは、所与の強度の間に「対照 (Kontrast)」があることである。則ち、突然の大きな音とそれ以前の状態との間、そして、小さな音とまわりのひっそりとした状態との間の「対照」である。では触発は対照によって決まるのだろうか。

次のように言われている。

「触発はある意味では対照の機能である。とは言っても、対照だけのではないのだが」(149)

と。「対照だけのではない」とすれば触発はどのようにして決まるのだろうか。

フツサールは次のような卓抜な例をあげる。

「大きく始まる音がピアノになつていく際、通常であれば気付かれないような極めて小さな (feinst) ピアノになつても、触発力の点についてその音を保持する」(153)。

フッサールはこれを、触発が「伝播」(151)する現象として分析する。つまり、始まりの大きな音の持つ触発力が、「触発力の連続的な移送 (Übertragung)」(152)が生じることによって、通常であれば気付かれないような小さな音の「手持ちの (vorhanden) 触発が変化する現象」(163)として分析するわけである。

こういったことから、「触発の本質的相対性」(163, Vgl. 150, 151)という重要な特徴が確認される。特に、例えば、「それ自体において触発零ということ」は、本来意味を持たない筈なのである。実際、「強い触発が、「零になる場合も含めて」弱くなり得るのは、その強い触発が依存している諸条件(「他の所与の触発との関連」)がそれに応じて変化する場合なのであり」(163)、「また、逆に、零の触発は、他の触発との関連が変化すれば、「正值の触発 (positive wertige Affektion)」(167, Vgl. 170)になることもあり得るわけである。「段階性 (Gradualität)」は「触発の本質に存する」(163)特質であるが、しかし、「対照」も含め、「伝播」によって流動し得る、「本質上相対的」なものなのであり、本来的にはそれ自体に固有のものではないわけである。

四・三 遠想起の可能性と総合の性格

「遠想起」、精確には、その「逆射的喚起」の契機の可能性はこのように基礎づけられるのである。則ち、自然的には触発力は弱化し、遂には零になるわけであるが、「触発力の補給 (affektive Kraftzufuhr)」(173)、「触発力の逆射 (Rückstrahlung)」(173)、「触発の伝達 (affektive Kommunikation)」(175)、「触発力の補助金 (Zuschub)」(175)により、「逆射的喚起」の可能性が説明されるのである。

しかし、具体的に、どのような条件で、このような触発力の伝播、また喚起が起こるのであるのか。この点について、フッサールの記述は、十分に体系的に整理されてはいないが、他の条件に較べて圧倒的に多くの議論がさか

れている「類似性」⁽²⁾という条件に即して、少し具体的に論じ、「類似性」という遠想起の「可能性の発生的条件」が、同時に遠想起の「誤謬」(vgl. 115f. 193ff.)の「可能性の発生的条件」をなしてもいること、そして遠想起の、精確には、その喚起の契機の総合の性格を確認したい。

私自身の最近の体験を例にとると、或る随筆を読んでいて、幼少期の怖ろしい体験を綴った箇所が出てきた際、自分自身の幼少期のそのような体験が喚起されたが、それを想起している(R_1)内に、自分自身のもうひとつ別のそのような体験が喚起され、それを想起した(R_2)。ところで、想起されたこれらの出来事が、一方で、同じ日のことであつたように思えるが、他方で、別の日のことであつたようにも思え、しかし、どちらであつたかを想い出すことができない。しかし、それまで、何度も、これらのことを想い出したことは憶えている。つまり、ひよつとすると、同じ日のこととして想起したかもしれないし、或いは、別の日のこととして想起したかもしれないわけだが、しかし、どちらとして想起したかを想い出すことができない。この場合、ともかく、幼少期の怖ろしい体験(a)という共通性によって、現在の体験と類似する、二つの想起 R_1 、 R_2 の内容が喚起されたわけである。実は R_1 、 R_2 の内容が別の日のことだつたとすると、aと共通部分をもつ或る a_1 によって、 R_1 の内容が喚起され(☐、|| 1、2)、例えば、 a_1 について R_1 の内容を喚起し得るような類似の現在の体験が起これば、先の R_1 においては明示的には想起されなかつた細部の内容が規定され、 R_2 の内容とは別の日のこととして想起されたかもしれないわけである。

この点に関するフッサールの記述(196-200)はその前後の箇所も含めて、テキストはかなり混乱しており、読解が困難であるが、私の解釈に基づきまとめてみる。aを類似性の観点として現在の体験Rと R_1 、Rと R_2 はそれぞれ「合致(Deckung)」(196f.)の関係にあるわけであるが、しかし、その限りで、 R_1 と R_2 も「合致」の関係にあるわけである。しかしそれは同時に「隠蔽(Verdeckung, Übertragung)」、「負の合致(negative Deckung)」、「抑圧(Verdrängung)」(196f.)でもあり、それ故「誤謬の根源」(115)でもあるわけである。つまり、例えば、別の観

点 (a_1 , a_2) からすれば想起されたかもしれない、 R_1 と R_2 の内容に可能的に内含された(日付の相違につながり得るような)相違を、観点 a の類似性による「合致」は差し当たり「隠蔽」せざるを得ないからである(無論、このことは、 R と R_1 、 R と R_2 についても言える)。ここでの類似性による総合は単なる「合致」ではなく、 \wedge 隠蔽的合致(Verdeckende Deckung) \vee 或いは \wedge 合致的隠蔽(deckende Verdeckung) \vee としつゝ、「重なり合う(Überschiebung)」(196) 或いは「重なり合う合致(überschiebende Deckung)」(206) とされるわけである。

五 想起の問題と歴史性の問題をつなぐもの——「思弁的思考の問題」——

五・一 「生」と「死」を巡る「仮説」

再び先の引用。

「以前私はこう考えていた。この過去把持的に流れること、つまり、過去存在を構成することは、完全な闇(volles Dunkel)においてもまだ、絶えることなく進行している。しかし(今は)「このような仮説(Hypothesis)はなくてもよい(entbehren können) ように思われて仕方がないのである(es will mir aber scheinen)」。つまり、このプロセスそのものが停止する(aufhören)のである。」(177)

「なくてもよい」や「思われて仕方がない」という慎重な表現に少し立ち止まってみたい。先ず、「なくてもよい」ということは「あつてもよい」ということを含意しているだろう。とすれば、「あつてもなくてもよい」という性格は、「停止する」ということにも跳ね返ってくる筈であり、つまり、これもまた一つの「仮説」であるということになるだろう。より実質的に考えても、先に見た「触発」の特質に基づく「想起の可能性」の説明それ自体にとって

は、過去把持の停止により触発が「零」になるということが、「なくてもよい」ことは、明らかであろう。ともかく、フッサールは、これら二つの「仮説」の間で揺れ動いている筈なのである。⁽⁸⁾

ところで、このような〈揺れ〉は、実は『時間講義』においても既に見出すことができたのである。

「理念的には (*idealtier*) 全てが過去把持的に保持されたままであるような意識も、恐らくは (*wohl auch*) 可能であろう。」(ZB, 391, Anm. 1)〔一九〇五年講義に基づく〕

他方、

「そして遂には、過去把持が停止するや否や (*sobald die Retention aufhört*)、もしこう主張することが許されるなら (*wenn man das behaupten darf*) 「持続全体」は、全く消失する。」(ZB, 387)

ベームによれば、この箇所が基づくとされる、一九一一年の日付を持つ手稿には、

「もし、過去把持が最早起らなるとすれば (*wenn Retention nicht mehr statthal*)、もしこう主張することが許されるなら 「持続全体」は、それ〔＝「過去把持的意識」〕から全く消失する。」(X, 362)

とあり、副文 (*sobald.../wenn...*) については、取りあえず後者に信頼を置き、異同の問題には拘らないことにするが、ともかく、「理念的には」も「恐らくは」と「もしこう主張することが許されるなら」という慎重な言い方の下

に、逆向きの二つの仮説が言われているわけである。

五・二 「思弁的思考の問題」

このような、恐らくはフッサールにおいて決着しない、「不毛」とも見える〈揺れ〉には、それ自身一定の意味がないだろうか。過去把持は進行するのか、停止するのか。則ち、忘却された過去は「生」なのか「死」なのか(二・三・三、四・一)。いずれもが、フッサールにおいて、「仮説(Hypothesis)」であるということは、単なる偶然ではないのではないか。「志向的分析」にとつての、文字通り「Hypo-thesis(基礎定立)」に関わる次元のことであるが故に、「仮説」であらざるを得ないのではないか。

フイנקは『志向的分析と、思弁的思考の問題』(一九五一年)の中で、「志向的分析が」「一種の生の哲学になる」ことに注意を喚起している⁽⁹⁾(例えば、「超越論的生(Leben)」、「生き生きとした(lebendig) 現在」等々)。フイUNKによれば、「生」は一つの「思弁的思考の問題」であり、つまり、「志向的分析」に対し——「無前提性の原理」にも関わらず——「言わば地下で(unterirdisch)働いている」⁽¹⁰⁾「あらかじめの思考(Vorausdenken)」⁽¹¹⁾の問題であるということになる。また、「分析は、思弁の行うことを行う(leisten)ことはできない」⁽¹²⁾のであり、「この生全体(Gesamtleben)の存在意味について反省する時、分析は不毛な議論をしてしまう危険におちいる」⁽¹³⁾のだとされる。フッサールの〈揺れ〉は、このような「あらかじめの思考」の次元に関わっているが故にはないかと考えられるのである。

五・三 このような位置づけに対する疑問

しかし、四・一で述べたように、生/死は、『分析』においては、基本的には「触発」によって規定されていたのであり、とすれば、本来は「志向的分析」によって思考可能であり、それ故、それに還元し得ない「思弁的思考」の問題として位置づけるのは不適切ではないのか、という疑問も想定し得る。

しかし、触発的であるということ、或いは、触発零ということが、実は、生／死の方から「あらかじめ思考さ」れていた、とすればどうだろうか。実際、既に見たように、広義の触発は「生動性 (Lebendigkeit)」として定義されていたわけであり、つまり、「触発」自身が既に「生」を前提し、「生」のほうから「あらかじめ思考さ」れているわけである。とすればやはり、生／死には、触発の正／零を意味する単なる「比喩」(「自然的な語りの転用」)として片づけるのではなく、敢えて言えば、むしろ字義的に、言葉通り「ロゴスに聴いて」思考すべき側面があるのではないか。

五・四 想起の不可能性の可能性

このような次元の問題について、方法論的には曖昧な (dunkel) まま、もう少しだけ思考を先に進め、フッサールにおける歴史性の問題へとつなげていく可能性を示唆したい。

先に見た想起の「志向的分析」により、過去或いは記憶 (Gedächtnis) の「死」の可能性は、二重に示されていたと言えるだろう。第一には、過去把持を通じての触発の自然な弱体化傾向。そして第二には、「想起の可能性の発生的条件」そのものが、「誤謬」の「可能性の発生的条件」であったことである。しかし、にも関わらず、「生き返る (wideraufleben)」(114) ことは常に可能なのだろうか。フッサールなら、これを「薄まらない」「自分の過去」自体 (unverdrängtes Selbst) の「理念」(206) として想定し、或いは、「あらかじめ思考し」てしまっているであろう。無論、「生き返る」ことの可能性を「理念」として認めるということは、同時に、「生き返らない」可能性をも含意している。しかし、我々は、記憶について、更にむしろ「生き返る」ことが不可能である可能性をも引き受けていないだろうか。例えば、自分の最初の記憶。あの時窓から雨が降るのを眺めた記憶。しかし、本当に「あの時」が想起されているのだろうか。私は「あの時」の想起を、自分の最初の記憶として、何度も反復してきただろう。また、「あの時」の窓は、それ以後にも何度も見ただろうし、多分それ以前にも、何度も見たであろう。一体、私は何

を想起しているのだろうか。「あの時」を想起しているのか、それとも、「あの時」の想起（或いは想起の想起、或いは想起の想起の想起、等々）を想起しているのか（「想起の「中」の想起」（III/1210）、「それとも「あの時」とは別の日（或いはその想起、その想起の想起、等々）を想起しているのか。そもそもそれらを区別することが不可能なほどに曖昧に（dunkel）なっていないだろうか。私の〈始まり〉の想起は、それ自身の内に、その〈始まり〉を想起することのできぬ言わば〈習慣〉と化したものを〈借用〉することによって支えられていないだろうか⁽¹⁴⁾。なるほど、そのようなものも、何かへきつかけ〈があれば（似たような体験、或いは、脳の特定位に電気刺激を与えるなど）、遡って想起することができるともされない。しかし、そのようなへきつかけ〈になり得るものが全て消失してしまい、そのようなものを「喚起」し得るような「現在」を体験することが最早不可能であるということもあり得るのではないだろうか。少なくとも記憶ないし想起に伴う何らかの感性性、或いは不安は、このような〈想起の不可能性の可能性〉を、恐らくは、単に偶然的なものとしてではなく、本質的なものとして、開示していないだろうか⁽¹⁵⁾（例えば「形見」の品を残すことができたり、或いは、それを大切にすることができるといふことは、このような感性性に支えられていないだろうか）。「生き返る」ことができないかもしれないのでなければならぬ（nicht können können müssen）「死」。記憶には、そのような〈完全な闇〉（volles Dunkel）が、至る所あり得るのではないであろうか。

しかし、フツサールのテクストに現れた「完全な闇」（volles Dunkel）についての、「このような〈ある〉という「決定」（Entscheidung）⁽¹⁶⁾は、「志向的分析」としては不可能である以上、「志向的分析」にとつてはそれ自身もまた完全な闇＝曖昧さ（volles Dunkel）に止まるだろう。だがまさにこのような「曖昧な」知「の中にこそ」「歴史的なもの」＝歴史性が潜んでゐる」（In jenem dunklen “Wissen”……steckt das Historische.）（VI. 512）とされているのではなかったか⁽¹⁷⁾。

五・五 歴史性の問題へ向けて

歴史とは、本質的に、〈死者〉の出来事或いは物語であり、また、本質的に、〈私〉の想起の限界を超え、直観の限界を超えたものである。フイックは『第六デカルト的省察』の中で、このような「非・所与性」(Ungegebenheit)⁽¹⁸⁾に関わる方法論的問題を、「構築的現象学」(konstruktive Phänomenologie)の名の下に考察している⁽¹⁹⁾。ところで、このようなものの知の可能性、或いは、「構成 (Konstitution)」「むしろ「構築 (Konstruktion)」を問うのが「超越論的歴史性 (transzendente Geschichtlichkeit)」「(VI, 191, 212) の問題であろう。「歴史性」をより分節化して、「両親によつて産出された (erzeugt) ものとしての世代 (Generationen) の連鎖」(XV, 583)、「誕生と死をもつた生殖」(Generativität)⁽²⁰⁾」(XV, 171)と捉え、また、これをぎりぎり〈私〉の内に入りつめてみれば、〈私〉の「誕生」が或る特権的位置を持つと考えることができるであろう。実際、それは、〈私〉が生まれた」ということを、〈私〉は確かに何らかの仕方を知っていると同時に、〈私〉はそれを想起することが原理上できない (XV, 171)、「どう性格を持っている⁽²¹⁾。このようなわけで、「誕生」の問題は、「超越論的歴史性」の問題を考える上で或る「範例的意味」を持っていると考えられるのである。

先に見た記憶の至る所あり得るであろう、完全な闇も、「誕生」と構造的に同じものであることは明白であろう。つまり、想起の内には、想起が不可能な「誕生」——想起から見れば「死」——の契機が、恐らく、至る所あり得るのでなければならぬわけである。つまり、この意味では、〈想起とは歴史である〉⁽²²⁾、とも言えるだろう。しかし繰り返し言えば、いずれにせよ、ここで「ある」という「決定」は、「志向的分析」にとつて完全な曖昧さ (volles Dunkel) に止まるのであるが。

ともあれこのように、想起の「志向的分析」の言わば〈綻び〉を辿つて行きながら、「思弁的思考の問題」を考え

るといふ仕方では、フッサールにおける歴史性の問題を考えていくことができるのではないか、そしてまた、それはフインクと言う「構築的現象学」の位置づけにもなるだろうという見通しのみを確認し、詳論は後の課題としたい。

注

フッサリアーナからの引用は、巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で、但し、XI巻のみページ数のみ記し、*Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins*. Hrsg. von Martin Heidegger. 2. Auflage. Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1980 についてはZBの略号とアラビア数字のページ数で表記する。また、「」は筆者による補足、……は省略を示し、傍点による強調は筆者の意図による。

- (1) 「フッサールにおける歴史の問題を考えるために——『危機』付録XXVIIIの読解を通じて——」(『哲学雑誌』、一九九五年) 参照。
- (2) 「連合」は「再生的連合」と「帰納的連合」(195f.)に分けられ、後者については一八四—一九一参照。
- (3) ここで言う「近想起」は、認知心理学的な概念としては、「短期記憶 (short-term memory)」或いはむしろその「リハーサル (rehearsal)」にほぼ等しく、また、「遠想起」は「長期記憶 (long-term memory)」の中でも「エピソード記憶 (episodic memory)」にほぼ等しいと考えてよいだろう。しかし無論、「二重貯蔵モデル」全体の中でこれらの概念が果たす役割或いはこれらの概念間の関係と、フッサールの想起論において二つの想起概念が果たす役割或いはそれらの間の関係は、相当に異なる。
- (4) 両側側頭葉に損傷を受けたH.N.は、短期記憶に関しては正常であったが、他方、長期記憶に関しては、エピソード記憶には障害が出たが、手続記憶は残存した。例えば、H.N.は、或る一定のパターンの作業を反復することによりその学習効果が現れた(手続記憶は残存)が、その作業を以前に行ったという事実を記憶していなかった(エピソード記憶には障害)(例えば、『認知心理学——記憶』、高橋陽太郎編、東大出版会、一九九五年、一九五—一九八頁)。
- (5) より適切な箇所としては、例えば、377ff., 422.
- (6) ベームによれば一九〇八—一九〇九年の日付を持つと推定される。他方、ベルネによれば一九〇九年九月以前ではないとき

ら。 Vgl. X. 324, Anm. 1; E. Husserl, *Texte zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins* (1893-1971). Text nach Husserliana Bd. X. Herausgegeben und eingeleitet von R. Bernet. PhB 362, Felix Meiner Verlag, Hamburg, 1985, S. 191, Anm.

(7) 「類似性」の位置については Holenstein, E., *Phänomenologie der Assoziation*, Martinus Nijhoff, Den Haag 1972, S. 41f. 参照。他の条件である「対照 (Kontrast)」・「近接 (Kontiguität)」に較べて「類似性」がフッサールの議論においてより重要な役割を演じているという事実とその理由が確認されている。また、貫成人「フッサールの連合論」(『現象学年報』四、一九八八年所収)は、我々とは異なる角度から、「類似性」から帰結する「連合現象」の特質として、「二重の不確定性ないし偶然性」に着目する(三五頁、四一―四三頁)。

(8) 実際には「この〈揺れ〉は更に複雑である。というのも、過去の規定については、生/死、覚醒/眠り、意識/無意識の境界線が互いに複雑に絡み合っていて、一義的な境界画定は困難であるように思われるからである。例えば、「……死んだ、或いはむしろ、眠った……」(178)などのように、一方では「眠り」は「死」の側に置かれていながら、他方では、「言わば……生としての、夢を見ない、空虚な眠り (Schlaf) ……」(380)などのように、「眠り」は「生」の側に置かれてもいるからである。

(9) Fink, E., *Die intentionale Analyse und das Problem des spekulativen Denkens*, in: *Nähe und Distanz*, Freiburg/München 1976, S. 132

(10) a. a. O. S. 154.

(11) a. a. O. S. 155.

(12) ebd.

(13) a. a. O. S. 152.

(14) 私は「フッサールにおける〈借用〉(Entnehmen)の問題および〈始まり〉(Anfang)の問題については、それぞれ、前掲論文(一九九五年)および「フッサール『第一哲学』における「現象学的還元」の道——現象学的還元の動機の問題序説——」(『論集』一五(東大哲学研究室)、一九九六年度)において、考察を進めるための準備的な作業を行った。

(15) 因みに K. Held は *Die Phänomenologie der Zeit nach Husserl*, in: *Perspektiven der Philosophie* 7, Gerstenberg, 1981, S. 216ff. において、我々がこの後に論ずる「誕生と死」、或いは「眠り」など、フッサールが「限界問題」として提起した問題を

- 『存在と時間』におけるハイデッガーに依拠しつつ、「根源的に気分づけられてある開示性」として解釈するという方向を呈示しつつある。
- (16) Fink, a. a. O. S. 147.
- (17) 『危機』付録XXXVIIIに現れるこの一文の解釈を、私は前掲論文（一九九五年）において試みた。
- (18) Fink, E., VI. *Cartesiansche Meditation. Teil II. Die Idee einer transzendentalen Methodenlehre*, Kluwer, Dordrecht/Boston /London, 1988, S. 72. (Husserliana Dokumente, II/1).
- (19) a. a. O. S. 61ff. またまた「構築的現象等」が扱う「全体性の問題」として、フッサールは「誕生と死」、「幼児期発達」（但し「幼児期」の幼児期が「我々の想起が届く範囲の彼方にある限りで」、「モナドの歴史」の三つをあげつつある (Val. a. a. O. S. 67-71)。
- (20) 「自然的な (natural)」な意味と「人格的な」意味との両方を含み持つことと鑑み (*Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Basel/Stuttgart, 1971ff. など) なる M. Riedel 担当の“Generation”の項を参照)、「取りもたせまい」誤字。この概念を主題的討論したのがこのこと。A. J. Steinbock, *Generativity and generative phenomenology*, in: *Husserl Studies* 12, 1995, pp. 55-79. 或るが、A. J. Steinbock, *Beyond Generative Phenomenology after Husserl*, Northwestern University Press, Evanston, Illinois, 1995. など。
- (21) cf. Cairns, D., *Conversations with Husserl and Fink*, Martinus Nijhoff, the Hague, 1976, p. 13
- (22) Casey, E. S., *Remembering. A Phenomenological Study*, Indiana University Press, Bloomington and Indianapolis, 1987. 『想起の内には』 溶解不可能な「遺抗」(unresolvable “resistance”)——残余 (remainder) による同時抵抗 (resistance) でもある——があるのであって「つまり、「志向的分析」とは異なるアプローチを要求するものがあるのだ」(p. xi) としての「志向的分析」を越えた一つの側面として「想起する (remember) とは、過去を commemorate (＝ナスタット性儀) 性・他者によって強められた想起 (p. 217-218) する」といえる (p. 257) として「resistance」として Casey は Derrida, *Dissemination* に言及してゐる。我々の主張とも重なるこのテーマは「しかしながら、“思弁的思考の問題”として思考されてゐるわけではなからず。

*本稿は「フッサールにおける歴史あるいは過去の問題について」と題して哲学会第三五回研究発表大会（一九九六年一月三日）

東京大学)において口頭発表した原稿をもとに加筆・訂正してなったものである。

*本稿は文部省科学研究費補助金(日本学術振興会特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。